



学長 芝山 豊 Shibayama Yutaka

別品の大学

人は他者の幸せへの関与を通じて幸福感を得ることが最近の脳科学などによって証拠づけられています。他者の痛みを感じることができなければ、真の幸福は手に入りません。清泉女学院大学・短期大学が「ここを育てる」大学を標榜する意味もそこにあります。

「ここ」と対をなすことばは「かたち」です。かたちは見えますが、ここは見えません。「大切なものは、目に見えない」のです。スペインに源をもつ本学設立母体、聖心侍女修道会のシスターたちが、過酷な疎開生活の後、長野市に居を構えてから今年で70年になります。本学は、その精神を引継ぎ、地域唯一のカトリック高等教育機関として、社会と地域に貢献して参りました。見えるものを通して、見えないものにここを向け、地域の暮らしに深く根をおろし、学知と本当の優しさに裏打ちされた知恵によって、世界をより善いものに変えていく。そんな女性たちを世に送り出す大学として、多くの卒業生と支援者に支えられ、小規模校ながら、「かたち」のみの格付けを超えた、活力と気品に満ちた、別格、別品の大学であり続けたいと思います。

みなさまが清泉での学びに加わられる日を楽しみにお待ちしております。

2016 年度 入学式式辞

新入生のみなさん、入学おめでとうございます。

新入生のご家族、関係者のみなさまにも。心よりお祝いを申し上げます。

新入生のみなさんは、今日から短期大学、大学の学生となりました。学生とは、予め決められたものを学生徒と呼ばれる存在とは違い、何を学ぶべきかを主体的に考える存在です。そして、短大を含む大学という学びの場は、ただの職業教育の学校ではありません。かつて、ジョン・スチュアート・ミルが『大学教育について』で語ったように、大学は、生計を得るためのある特定の手段に人々を適応させるのに必要な知識を教えることを目的としているのではなく、大学の目的は、有能で教養ある人間を育成することなのです。

例えば、TV に写し出されたバリやブリュッセルでのテロの犠牲者とその家族の深い悲しみに共感を覚えるとき、TV に写し出されることのほとんどない、名前を聞いたことのない町や村で、空爆やテロの犠牲となっている人々とその家族の悲しみにも同じく心を寄せ、際限のない暴力の連鎖を断ち切り、世界が少しでも善くなるために、一体、自分に何ができるだろう、と考えるのが教養ある人間の態度です。そうした真の教養を養うことを、本学では「こころを育てる」という言葉で表現しています。「こころを育てる」のは大学ではなく、みなさん自身です。その育てるべき「こころ」には、思考力や情操だけでなく、沖縄のことば「ちむぐくる」が含む懐深い優しさや、psychology の語源であるギリシャ語、プシュケが意味する生命の原理のようなものも含まれているでしょう。

「こころ」と対をなすことばは「かたち」です。かたちは目に見えますが、こころは目に見えません。「大切なものは、目に見えない」のです。「こころを育てる」には、まず、目に見えないものにこころを向けねばなりません。

本学図書館棟の外壁には SURSUM CORDA の文字が刻まれています。これは「こころを高くあげよう」という意味のラテン語です。高みを見ろというのは、上昇志向のようなものを意味するものではありません。しっかり、大地を踏みしめて、人間を超えた存在へ、静かにこころを向けることを意味しています。そうすることで、目に見えない大切なものが、小さな子どもたちや、いつも目立たず片隅にいる人たち、立場の弱い人たちとともにあることが分かるはずです。

ラテン語の句が大事にされているのはこの大学がカトリックのミッションスクールだからです。満州事変後、日本でキリスト教弾圧が始まっていた時期に、はるばるヨーロッパからやって来たスペイン系女子修道会、聖心侍女修道会のシスター達は、戦争が激しくなると、野沢温泉村に強制疎開させられました。彼女たちが、戦後も、ここ長野の地に留まり、女性の教育に生涯を捧げる覚悟をされたことによって、長野の清泉は生まれたのです。

大学のミッションは、カトリックあるいはキリスト教徒の数を増やすことではありません。福音の精神の核心を伝えることです。

教皇フランシスコは、先月二十四日の聖木曜日、ローマ郊外の難民受け入れ施設で、シリア、パキスタン、マリ、ナイジェリア、エリトリアなどからやって来た、イスラム教徒、コ

ブト・キリスト教徒、ヒンズー教徒など、女性を含む一二人の前にまずいて、彼らの足を洗いました。宗教が差別や排除のためのものではないことを、身をもって示されたのです。

大学で学ぶということは、与えられる知識をただ受け取ることではありません。書物に書かれていることや教師のことを鶏のみにせず、批判的に吟味し、自らの頭で考え、自分のためだけでなく、他者のために行動しなければ、真に学んだことにはなりません。大学や給大での学びは、一〇〇円を出せば、必ず一〇〇円の価値のものが手に入れられるといった等価交換のシステムではありません。これからの二年間、四年間で、何を受け取るかは、あなたがたひとりひとりの学びの姿勢によって決まるのです。

学びの場は決して教室やキャンパスの中だけにあるものではありません。様々な現場に足を運び、そこに生きる様々な人々と交わる体験が、あなた方をより深い学びへと誘うはずで

す。不安なこともあるでしょうが、心配はいりません。校舎の壁面には、もうひとつのラテン語のことば、DOMINUS TECUM が刻まれています。アヴェマリアの祈りに出るこの言葉は、「主はあなたとともにおられる」という意味ですが、いまのところは、難しく考えず、「誰かがきっと見てくれている」と思えばよいのではないかと思います。どんな時であつても、あなたは決して、一人ぼっちの身捨てられた存在ではあり得ないということです。

今年度も、また、この佳き日に、清泉女学院大学・短期大学の先輩たちが大切にまもりつづけて来た、二つの句 SURSUM CORDA と DOMINUSTECUM を、新入生のみなさんに贈り、学長からの歓迎のことばの結びといたします。